

# 誰もが勝てない夢想曲

時計屋

# 1 登校禁止の1日目

---

午前8時50分。あと10分で始業式が始まる。特に理由のない限り、生徒は講堂に向かう時間だ。まだ暑さの残る中、数多くの生徒の中で暑い暑いとわめくのが人間の生徒の標準的な行動である。

しかし、一生徒であるところの冬朔夜は、空調の効いた流翔魔技会会室で焦りもせず偉そうに座って仕事をしていた。魔技会役員にはそれなりの権限があるし、そもそもあんな人ごみの中に入っていけるはずがない。

「行くぞ」

そんな朔夜に声をかける人物がいた。今のところ唯一の、朔夜以外の流翔魔技会役員である。

「私は行かないと言うに」

「やれやれ。これだから私の強い原住民と付き合うのはためられるのだ」

どこに突っ込みを入れるか躊躇し、結局朔夜はこう言った。

「原住民というのは差別用語だよ、春宮。控えたまえ」

「おや、わたしにはそんなつもりはなかったのだが。翻訳装置の誤作動か？」

「だとしたら、完全にそちらの責任だ。何でもいいからさっさと始業式に顔を出して私の代わりをしてきてくれ」

「一言言うくらいできないのか、お前は。こういうのを何と言うのだったかな、自閉症？」

「断じて違う」

「なら、そういうことにしておいてやろう」

朔夜はいつも偉そうだとされる側だが、目の前の会計ほど偉そうな人物は見たことがない。まったく、他の人間は何を見ているのだろう。

「ではまた、そのうち」

「ああ」

そっけなく頷き、1人になった朔夜は、しばらく仕事に没頭した。9時のチャイムがなり、行動の様子を伝えるスピーカーから学年主任の昔話などが聞こえてくるが、無視する。文化祭も近く、古来からの伝統として決定事項には書類が付きものであるからして、魔技会長の仕事がなくなることはまずない。

一段落した所で、朔夜は携帯式の電話を取り出し、登録してあった番号にかけた。

『Good morning, Mitsure speaking. Who's calling?』

この前同じ電話を通して聞いた少年よりも、幾分流暢な女性の声が聞こえた。ただし、随分と焦っている。

「漣教諭予定者、残念だがその様子では遅刻のようだ。マイナス5点は堅いね」

『何だ、エセ中坊かい。こっちは忙しいんだよ』

不機嫌な声。今にも切られそうな様子に、慌ててすぎる。

「待て。星河はどうしている？」

慌てていてもそうは聞こえないのが朔夜という人物である。

『一真に用かい？ じゃあ、替わるから好きにしてくれ。じゃ』

ガン

台にでも置いたらしい、硬い音。どうやら、目的の人物に替わるまで電話を保持するつもりはないらしい。新任早々の遅刻では仕方がないかもしれない。

(遅刻など誰も気にしないだろう)

などと思っているうちに、電話から声が聞こえた。

『冬？ さっき姉ちゃんから聞いたんだけど、今日始業式だって!? 何で教えといてくれないんだよ!!』

耳元で響いた大きな声に、少々電話を遠ざける。

「必要がなかったんだが、そういえば、彼女は君の家に越してきたのか」

『うん。うちのほうが近いし、タダだから。それより、必要ないって?』

「今日は登校するな。禁止だ」

率直に言う。

そして、朔夜はさらに受話器を遠ざけた。

『ええ—————!?!』

足りなかった。音量をある程度以下に限る機能を、今度開発部に頼んでみよう。

「転入生とはそういうものなんだ。歓迎の準備……となると語弊があるかな。まあ、とにかくこちら側の準備を整える必要があるんだ。私は参加できないが」

『……さっぱり分からないんだけど』

そうだろう。

「どうしても文句があるなら、放課後——そうだな、3時以降に来てくれ。私はおそらく仕事しているだろう」

『放課後ならいいのか?』

いぶかしげな声。

「まあ一応。ただし、目立たないように制服を着てきてくれ」

『何なんだよ』

不満げではあったが、一真は電話を切った。おそらく放課後來るだろう。

『今回の転入生は、e, h, l, o, s組に一名ずつ。以上』

スピーカーから、会長の代理を務める会計の一言が聞こえた。

午後2時50分。あと10分で約束の時間になる。

ルルルルル

電話が鳴った。試作携帯ではなく、内線だ。

「流翔会室だ」

手短かに告げる。

『こちら守衛室。前に言われたらしい人物が来た。あと百メートルほどで校門だ』

「了解した」

返事をする、向こうから電話が切られた。相変わらず愛想のない門番である。

「春宮、迎えに行ってくるので、できれば紋証を用意しておいてくれ」

「やれやれ、物好き」

誰を指して物好きと言っているのか判然としなかったので放っておく。

校舎を出ると、果たして、校門から少年が1人入ってきた。ズボンとブラウスは指定の物で、ブラウスのボタンは2個ほど空いている。上のボタンまできっちり留めた朔夜とは対照的だ。

放課後で人が少ないとは言え、自分から話しかけたら目立つだろうと思って向こうが気づくの待つ。

しばらくして、気がついた一真が駆け寄ってきた。

「何だ、こんな所にいたのかよ。声かけろ」

「残念ながら、待ち人はもう1人いてね。急いで君に声をかけても意味がない。それに、私が声をかけたら目立つだろう」

「そうか？」

一真が首をかしげた。直後。

<誰だ、あれ？>

誰かの思考が聞こえた。

そちらを見ると、通行人の1人と目が合う。その途端、相手は視線を逸らして、足早に立ち去った。

<流翔にわざわざ話しかける奴なんて初めて見た>

また違う誰かの心の声。

またも見るが、今度は視線が合わなかった。視線の先にいるのは、自分ではなく一真だ。

「俺が思うに、お前に話しかけられるより、お前に話しかけたほうが目立つんじゃないか？」

彼も視線を感じたのか、そんなことを言うてる。

こうなるなら、自分が会室に残っているべきだったか、などとも思う。

「で、誰を待ってるって？」

一真は気を取り直すのも早い。

「パソコンの整備とバージョンアップを任せている業者だ。2週間に1度は来る。卒業生だが」

「俺、コンピューターってよく分からないんだけど、どうなってるんだ？ ラジオをバラしたこと位はあるけど」

「本人に直接聞いてくれ。私も詳細は知らない。……分解して組み立てたのか？」

「いんや。バラバラにした時点で『貴重な情報源に何するんだ！』って父さんに怒られて、結局父さんが組み立てなおした」

「どこの未開の地での話だね、それは」

「でも、その心意気は評価するわよ、少年」

割り込んできた声に、朔夜は密かに動揺した。どうも、一真との会話に気を取られすぎていたらしい。自分としたことが。

いつのまにかすぐそばに現れていたのは、20前後の女性。しかし、ショートカットに作業服で、色気が全くない。

「はい、流翔君、久しぶり。そこの少年は紹介してくれるんでしょうね？」

朔夜にとって問題のない人物とは、2種類いる。思考が聞こえない人物か、聞こえても意味のない人物だ。一真は前者であり、春宮は後者である。

この先輩は、半分後者であった。聞こえることは聞こえるのだが。

<メモリの仮想化のおかげで処理がもたついてたのは落ち着いてるけど、処理しすぎてログがたまってないかチェックしないと一。いっそのことほんとに複数コア実装しようかしら>

日本語でも、よく分からない言葉というものはあるものだ。

「それについては、後で」

これ以上目立つのも問題だったので、校舎内に2人を導く。

ある場所に来ると、かすかなピツという音がして、床に穴が開いた。

「うわっ!？」

一真が分かりやすく反応する。無視して飛び降りる。実は身長ほどの深さしかない。

この辺りには人払いの結界が張ってあるので、周囲に人影はない。それを確認して、朔夜は2人を互いに紹介した。

「こっちは転入生の星河一真、無謀にも魔技会に入る気があるようで。星河、こちらは古降谷<sup>こふるや</sup>結梨<sup>ゆうり</sup>、説明はさっきした通りだ。私たちの6年上、つまりちょうど1つ前の流翔の代に当たる」

言いながらも、穴の中でさらに手順どおりに壁やら床やらいじる。またも電子音がして、今度は地下に向かう階段が現れた。それを確認して結梨も降りてくる。

「星河？」

上に残っている少年を促す。一真は素直に従って降りてきた。

「すごいなあ。秘密基地みたいだ。どうなってるんだ？」

目を輝かせている。

「とりあえず、最初はこれに反応している。あとは、企業秘密だ」

襟元のピンを示す。特殊な金属で作られた六芒星の、左上の位置に赤い石が付いている。

「それ、何だ？」

「魔技会役員の印。懐かしいなあ。それ、あたしたちが高1の時に作ったんだから」

「ちなみに、左上が流翔で、他もそれぞれ対応している」

結梨の言葉を朔夜が補う。

「やっぱ秘密基地だよな。すげえ」

話しながらも、所々操作して、やっと1つの扉の前にたどり着く。

何の変哲もない木製のドア。かかった札に、「流翔魔技会会室」とある。そして、その扉は内側から開かれた。

「遅かったじゃないか。へえ、これが物好きな現地人」

顔を出した会計に、一真が目を見開いた。

「何だね？」

「……お前の唯一の仲間が、女の子だとは思わなかった」

長い水色の髪と、見る角度によって色を変える不思議な虹彩を持つ異星人が、スカートを翻し

で一真に近寄り、何か手渡した。

「うわあ、いいのか、これもらっても」

六芒星の紋証。朔夜のもの違って、左上についているのは青い石だ。

「待て、春宮」

「何か問題が？」

「問題というか……問題だろう」

「順当だ」

朔夜のためらいを一言で振り切り、一真に向かって言い放つ。

「こちらでの名前は春宮春子という。会計責任者を務めている。できればその物好きが長く続いてくれることを祈る」

差し出された手を握り、よろしくと言った後、一真はしきりにこちらと春子の顔を見比べた。

「何だね」

ため息交じりに尋ねる。

「似た物同士で気が合うんだな、きっと」

「「事実無根だ」」

声が重なる。

「やっぱり」

一真は1人で勝手に納得してしきりに頷いている。

心外だ。

## 2 騒動必至の2日目

---

午後7時30分。

始業前に、朔夜は一真を呼び出した。

教室では人目があるかもしれないので、図書館の一室をわざわざ借りている。

朔夜が七時半ちょうどに来ると、一真はもう来ていた。座って、なにやらいじっている。

「おはよう。何をやっているのだね？」

挨拶しながら覗き込むと、そこにあったのは、折りたたみ式の機械。モニターとキーボードが見えた。

「……それはもしかして、パソコンかね？」

「うん。結梨さんがくれたんだ」

簡単にくれる物でもないが、よほど気に入られたらしい。確かに、昨日は熱心にいろいろ聞いていた。

「そういえば、昨日はこれとかパソコンとかにごまかされて聞きそこねたけど、結局何なんだよ？ 分かりやすく教えろ」

ミニパソコンの電源を落として、一真が向き合ってくる。

示されて気づいたのは、昨日渡した紋証を、一真がきっちり付けているということだった。

「それは家から付けてきたのか？」

「うん」

「それはやめておいた方がいい。いろいろと目立つ」

「だから！ 何で登校するなとか、目立つなとか言うんだよ!? 説明しろ説明。コミュニケーションが大事だぞ」

ため息をつく。もちろん、説明しないつもりはなかったのだが。

「昨日は君がパソコンに熱中していて聞く耳持たなかったわけだが」

こちらがごまかしたわけではないことを、一応主張しておく。

「とりあえず、これを」

ファイルから、何枚かのプリントを取り出して渡す。わら半紙に学校の印刷機で印刷された、何の変哲もないものだ。

「えーと、なにに？ 名前、名前の読み、」

一真は律儀に指定された空欄を埋めようとする。が、途中でさすがにいぶかしげな表情になって鉛筆が鈍る。

2枚目に入るとまったく書かずに内容を目で追うだけになり、しばらくしてやっところちらに視線を向ける。

「何だこりゃ」

妥当な感想だ。

手元にある同じ物を見る。

名前、名前の読み(ひらがな)、漢字の文字数、ひらがなの文字数。それぞれの漢字について、部首・画数を書く欄などもある。ついでに、それぞれの横に数字なども書いており、怪しいこと

この上ない。

「転校生で遊ぼうという企画だ。私は参加できないが」

「??？」

まだ要領を得ない顔をしているので、分かりやすく言ってやった。

「賭けだ」

「かけて……」

言われたまま繰り返し、プリントに視線を落とす。

「かけて、賭けかよ!？」

「だからそう言っている」

肯定し、補足してやる。

「始業式では転入生の組と数のみ発表される。該当するクラスの者は賭けに参加できるというわけだ。もちろん、事実を知る者は参加できないし、事実を披露される前に賭けないと無効だ」

「……何賭けるんだ？」

「実技とか、レポートとかが一般的かな。大抵の者は参加することが楽しいので、大して賭けはしない。実技1回とかが標準だろう」

「じゃあ、ひらがな2文字目が『し』とかに賭けると、当たりになるわけか？」

「君の場合は、そうだな。さ行やい段という賭け方もできるよ。オッズは違うがね」

一真はプリントをもう一度見直す。

「この数字、えーと、そのオッズとやらなのか？」

「そう。予想払い戻し率、だったか？ 名前以外にもいろいろとネタはある。1か月经っても分からなかったことは流れて胴元の儲けになるから質問攻めに合うだろうが、もちろん答えなくていい。放っておけ」

クラスに紹介する前に、これだけは言っておかねばならなかった。一真は最初の方しか見えないが、そのうちプライバシーに踏み込んだ項目も出てくるからだ。好きな食べ物くらいならいいが、殺人経験の有無など聞かれても困るだろう。

「目立つなと言ったのは、下手に情報が漏れて、まだ賭けてない奴に逆恨みされたり、配当が狂ったりしたら問題だろうと思ったからだ。あと、事実だけではなく、予想ものもある。入るクラブとか委員会とか、最初に遅刻する日とか。勧誘には気をつけてくれ」

「そうするよ」

頷いた後も、興味深げにプリントを見ている。いつのまにか2枚目を見ているようだ。

「それにしても、二枚目は能力か。こんな分類するのか？」

「その分類は魔技会のものと同じだよ」

大雑把には、作成・変化・操作・知覚・特殊、あるいは攻撃・防御・補助・妨害・移動・一般・特殊などという分類がある。

「私なら、知覚・一般・常時・聴覚型、といったところか」

「ふーん」

そんなことをしているうちに、1時間目の時間になった。

午後8時30分。

「星河一真です。よろしく」

一真が挨拶をすると、クラスのあちこちで悲鳴が上がった。

<は行かー。あー、変えとけばよかった>

<男かよ。願望もこめて女にしといたのに>

<よし！ 真が入ってる！>

肉声に出した者と出さない者がいるが、どちらでも朔夜にとっては大差ない。

「質問は五つまでなら、答えられることは答えるけど」

先に自分に聞いていただけあって、一真は質問を限った。

「家族は何人ですかー？」

「3人だよ。残念だけど、兄弟はいないな」

またも悲鳴が聞こえたが、無理にでも気にしないことにする。

「誕生日は？」

「1月17日。祝ってくれるのか？」

こんな調子で出てくるのは結局一般的な質問だ。

しかし最後になって手を挙げたのは、鋭嶋一だった。彼も夏休み中に一真に会った人物だったので、賭けには参加できなかったはずだが。

「魔技会に入ったんだ？」

そういえば、結局彼は紋証を付けっぱなしだ。目立つと言ったのに。

「うん」

一真はあっさり頷いた。

教室が静寂に包まれた。朔夜にとっては耳の痛い沈黙だった。

午後12時30分。

昼休みに、朔夜は一真を連れて魔技会室に行き、書類仕事を手伝わせた。

「なあー、今日の1時までとかいうのが10枚はあるんだけど」

「早く回してくれ」

「根本的に間違っていないか、この仕事量」

書類の山を見て一真は言うが、朔夜にとっては見慣れた光景である。

「とりあえず、締め切りが今日明日の分だけ分けておいてくれ」

「何で俺がこんなに字を見なきゃいけないんだ。お前だって、こんなの続けてたら目が悪くなるぞ」

「少なくとも今のところは問題ない」

どの書類にも目を通さなければいけないことには変わらないが、分類を一真がやってくれるだけ少しはペースが上がる。

珍しく、昼休み終了まで十分もあまったので、書類を届けるのを転送ではなく徒歩にすることにする。運動もするべきだ。

「この5枚を波輪の所に持っていってくれ。波輪の校舎は、南門を出て右に行って郵便局の角を曲がれば見える。届けるのは、高校I年T組の古降谷<sup>ゆうじ</sup>夕路だ」

「古降谷って」

「昨日の古降谷結梨の妹だよ。副波輪だ。では、よろしく」

届けるのを1件一真に任せ、残りを自分で行ってくることにする。

三時間目は理科実験室だった。

結局朔夜は余裕で、一真はギリギリで部屋に入った。

駆け込んできた一真は、一に誘われて席に着く。どうやら、同じ班らしい。

目が合ったが、にらみつけられた。

何か、波輪から無理難題でも押し付けられたのだろうか。

教師が入ってきたので、気にはなったが休み時間まで持ち越した。

午後2時30分。

3・4時間目と続いた実験が終わり、一真と接触した。

「はい、これ」

新たに渡されたらしいプリントを押し付けてくる。内容を検めたが、特に問題になりそうなことはない。

だが、一真がなにやら怒っている様子なのは確かだ。

「これ、石が付いてないのを付けてる人見たんだけど」

紋証。

確かに、赤い石も青い石も付いておらず、六芒星と同じ金属で所定の位置に丸が付いているだけの紋証というのがある。波輪魔技会なら、それを付けている者もいるはずだった。

朔夜は説明不足を思い出し、少し動揺した。言っておくべきことは、賭けのことだけではなかった。

「古降谷先輩に聞いたんだ。赤は会長、緑は会計、青は副会長、なんだって？」

「……ああ」

肯定するほかない。

「石が付いていないのは、一般の役員だ」

自分でも何が言いたいのか分からないが、とりあえず補足した。

「俺は、生徒会に入ってもいいとは言ったけど、副会長なんて聞いてないぞ」

予想通り、一真が怒っているのは、他の誰にでもなく朔夜自身に対してだ。

「こんな騙し討ちみたいなのはごめんだ」

反論もできず、朔夜は一真の顔を直視できないまま、突きつけられた青い紋証を受け取った。

立ち去る一真を呼び止めることは、できなかった。



### 3 緊急避難の3日目

---

午後8時20分。

予鈴が鳴ったが、朔夜は相変わらずに魔技会室にいた。

「おや、おはよう。何をしている？」

春子が入ってきて偉そうに挨拶した。

「おはよう。そうだ。これを片づけておいてくれ」

そちらを見もせず、青い石の紋証を放る。

「おや、もう返却されたのか？」

「春宮のせいだ」

無意識に責める言葉が出てきて、自分でも驚く。

「それを、彼にも言ったのか？」

「いや……」

弁明どころかろくに何も言えなかった。

「忘れてくれ。言わなかった私が悪いんだ」

「それにしても、よく分からないな」

春子が首を傾げる。

「もしかして、お前に愛想を尽かしたのではなく、副会長が嫌なのか？ どうせ、3人しかいなければ、副会長だろうと何だろうとやることは変わらないだろうに」

「そういう問題ではない。礼儀の問題だ」

ため息をつく。仕事は日ごとに増えていくし、最悪だ。

「教師に気分が悪いので休むと言っておいてくれ」

「学生の本分は学ぶことではなかったか？」

「知るか、そんなもの」

今教室に行く勇気は持てない。

ピリリリリ

電子音が鳴った。

「アラームか？」

「いや、電話だ」

ふところから携帯電話を出す。しかし、この番号を知っている者など、限られるはずだが。

「もしもし、流翔会長だが」

『……冬？』

一真だ。

「星河？」

『あのさー、悪いんだけど、先生に欠席だって言っといてくれよ。駅までは行ったんだけど、ありゃ無理だ。ほんと、尊敬するよお前』

言っていることがよく分からない。

「星河、その……」

『何だ？』

「いや……何でもない」

『ふーん。明日は行くから。じゃ』

ブチッ ツー、ツー、ツー

電話は素早く切れてしまった。朔夜と話すことを拒否したようにも思える。

「話の続きだが」

春子に言われて、よく回らない頭で何の話だったか、と考える。

「確かに、言わなかったお前に責任があるな」

そういえば、電話の前にも一真の話をしていた。

「そんなことは言われなくても分かっている」

「言葉で伝えなければ、基本的には意思疎通できないだろう。騙すつもりはなかった、と一言言えばそれで済んだのではないか？」

朔夜は思い違いをしていたことに気がついた。「あの紋証は副会長を示す物だ」ではなく、「普通の紋証ではなく青いのを引っ張り出してきたのは自分ではない」と言わなかったことを彼女は指している。

「君に責任を押し付けて何になる」

「押し付けるのではなく、事実だろう。さて、わたしは真面目な学生として授業に出てこよう」

去ろうとする春子を、あわてて呼び止める。

「待て。よく分からないが、星河も休みらしい」

聞いて、春子は器用に片眉を吊り上げた。

「風邪か？」

「違うと思うが……」

かけ直して聞く気は起きない。

「3日目にして欠席か。案外、真面目な学生というのは少ないのだな」

そんなことを言いながら春子は去っていった。

「最初の欠席が3日目か。……大穴だな」

どうでもよかった。

午後12時20分。

「やっほー」

お気楽な声が会室に響いた。

声の正体は古降谷夕路、波輪魔技会副会長だ。

朔夜は、いつのまにか昼休みになっていることに気づいた。

「相変わらず景気悪そうな顔してるね、冬坊。星河くんは？」

「景気は悪くない。坊と呼ぶな。星河は休みだ。ついでに言うと、魔技会も抜けた」

あんたのせいだ、という言葉が出てきそうになって困った。どうも今日は調子がおかしい。

「あれ、そうなのー？ 元気そうだったのに。はい、これ」

「どうも」

書類を渡され、心にもない礼を口にする。何だかうんざりした。

「早いとこ仲直りしなよ。謝った方の勝ちなんだから。じゃあねー」

勝手にできた書類から必要な物を見繕うと、嵐のように去っていった。

「気軽に言ってくれる」

どいつもこいつも。一真はよほど気に入られたらしい。

それ以上考えるのはやめて、朔夜はまた仕事に没頭した。

午後4時20分。

授業をサボって書類に挑んだこともあり、向こう1週間くらいの締め切り分は終わってしまい、やる事がなくなったので朔夜は帰ることにした。むしろ帰れと春子に言われた。

(なぜ会長が会計に虐げられなくてはならんのだ)

腑に落ちないまま、地上に出ると。

「ここにいたか、教師の敵！ この水連様から逃げられると思うなよ!!」

目の前に、仁王立ちする新任教師。

(勘弁してくれ)

「何が教師の敵なんだ。これでも成績はいい方なのだが」

「何言ってやがる。授業サボる奴は教師の敵だよ。さて、弁明するならしてもらおうか」

「気分が悪かった」

正直に言う。

「第一、それなら文句をまず従兄弟に言ってくれ」

反論される前に、違う所に話を回す。

「そういや、一真いなかったね。あんた、何かした？」

藪蛇だ。

「私は欠席の連絡を受け取っただけだ」

「んで、それを言ってきたのはあんたの秘書だっけ？ ちなみにこの辺りから出てくるだろうって教えてくれたのはあの子だよ」

彼女は、自分に何の恨みがあるのだろうか。

「とにかく、今日は放っておいてくれ。あとで反省文でも何でも書こう」

抗弁する気力がない。

「へえ、ただ欠席しただけなのに、反省するべきことがあるってのは認めたね？」

「魔技会役員として黙秘権を行使するよ。総長でも通してくれ」

脇をすり抜ける。新任教師なら制度はよく分かっていないだろう。

「総長？ あんたらの親玉かい？ 待ちなっ」

そう言われて待つ奴はいないのである。

「まあ、あたしだって身に覚えがないわけじゃないし、1回くらい見逃してやったっていいんだけ

どね」

足早に進む朔夜を追いかけながら、水連が言うてくる。

(それならそうと最初から言うてくれ)

しかし、最後の逆接が気になる。

「あんたに聞きたいことあったんだよ」

「知っていることなら答えなくもない」

返事をしながら、無断欠席以外に問題となることは何だろうかと思いを巡らせる。考え付かない

。

「昨日一真が勧誘から逃げるときに、手助けした奴がいるらしいけど、あんた？」

「？ そんな覚えはないが。具体的には？」

「壁だか床だかすり抜けたって話だね」

「残念だが、そんな能力はないよ。鋭嶋かもしれないな。詳しくは知らないが、物質変換系だと聞いたことがある」

「ま、誰でもいいけどね。とにかく、明日はサボんなよ。サボったら、うちに引きずって行って補習してやる」

うち、すなわち星河家だ。

「肝に銘じておく」

「そうしとくれ。じゃ」

水連は颯爽と去っていった。あの一族は姿勢がいいな、と思う。2人しか知らないが。

校門に差し掛かると、見知らぬ少年が門番と話していた。

眼鏡のかかった生真面目そうな顔は、今は狼狽に包まれている。着ているのは半袖のブラウスにズボンという組み合わせで朔夜と同じだが、色などからして他校の制服のようだ。

「で、その誰々の友人だという証拠は？」

「いや、その、証拠はないんですけど」

<どうしよう、一真、出てきてくれー>

「一真？」

ちょうどすれ違うときに聞こえてしまったので、思わず足を止める。

「そう、星河一真です！ あれ？」

主張してからこちらに気づいたらしく、相手が振り向く。

<誰だろうこの人、一真の知り合いかな。何か怖そうな人だけど。先輩とか？>

「残念だが、おそらく年は同じだと思うが」

「え」

<嘘、16才？ でも、何で分かったんだろ、顔に出たかな>

「正確にはまだ15だが……、とにかく、星河は今日は休みだよ」

言われて、少年はきょとんとした。

「休み？ 一真が？」

「そう」

「日本にいないとか？」

「いるはずだが」

少なくとも、明日は来ると言っていたし。

「それはおかしいじゃないですか」

「私に言われても困る。家にでも行ってみたらどうだ？」

<家か、うーん。家まで行くのはなあ。一言謝れば>

(謝る?)

「ありがとうございました。ご迷惑かけてすみません」

後半は門番に言い、頭を下げて少年は去っていった。

「彼は何だと？」

門番に尋ねる。

「ここに転入したはずの星河一真の友人だ、言いたいことがあるから会わせてくれと」

一真の昔の友人が、わざわざ違う学校まで何かを謝りに来た、ということらしい。

彼はおそらく一般人だ。だが、何の力がなくとも、謝る勇気は持っている。

春子や夕路の言葉を思い出す。

自分も、謝ったら許してもらえるだろうか。

ちらりとそんなことを思ったが、すぐに打ち消す。

高望みはろくなことに繋がらない。昨日、それを学んだばかりではないか。

## 4 音信不通の4日目

午前8時10分。

昨日必要書類を出しておいたこともあり、朔夜はあっさり高2の教室にもぐりこんだ。

曰く、「飛び級のための見学」。魔技学園では、必要単位さえそろえれば高校以降は飛び級できる。しかし、滅多にやる者はいない。必要単位には実技も含まれるからである。実技を倍やるのはさすがに大変だし、魔技学園の生徒は大半が「学校にいたい」のであり、わざわざそれを短縮しようとはしないのだ。

そんなわけで、朔夜は高2の教室にいたのであった。

「もしもし、流翔会長。こんなところで見るとは思いませんでした。相変わらずお元気そうで」

特に隠していないので、朔夜は能力はよく知られている。同じ学年はもちろん、違う学年にもある程度は広まっているはずだ。少なくとも、顔から流翔会長だと判別できる人物は、能力も知っていてしかるべきである。

それでも話しかけ来るこの人物を、朔夜は知っていた。

「どうも、幻瑞会長。魔技祭の準備はどうだね？」

「多少の不安はありますが、きっとどうにかかりますよ。毎年そうですからね。おそらくそちらもそんなものでしょう？」

1つ上の魔技会長であるききしま れん聞島 鏈 には、能力が効かない。彼が何らかの特殊能力の対象になった場合、その能力は効果を発揮せず、彼の体に熱として溜め込まれることとなる。もちろん溜めすぎると体に毒だが、何故かその熱は発声によって体外に放出されるため、彼はセリフが長いし、声も大きい。敬語なのも、その方が文字数を稼げるからに過ぎない。

「それはそれとしても、どうしてこんな所にいるんです？ うちの学年に動揺が広まるのはただけませんか、何よりもまず、あなたのような常時型能力の持ち主は、私個人に対して非常に迷惑です。できれば今すぐ出て行ってください」

性格は全然丁寧ではないし、容赦もないのだ。

「心配はいらない。ずっと居座るつもりは……」

ないのだろうか。学年を移ってしまえば、校舎も違うことだし、一真とはまず顔を合わせない。

「なら、1つだけ問いただしておきましょうか。あなたがここにいるのは、うちの学年の生徒、ないしはうちの学年の何かに用があるからですか？ 本当に飛び級したいのなら、もっとずっと前から来ているでしょうからね」

「いや、特に何か用があるわけでは」

「ほほう、うちの学年に用があるわけでもないのにこんな所にいるということはどういうことですか？ こちらとしては、何かから逃げてきたとしか判断できませんよ」

言葉が突き刺さった。

「ご自分のところの問題を、うちに持ち込まないで下さい。逃げなどという非生産的なことをし

ているくらいなら、また副会長でも見つけてきて仕事の効率を上げたらどうです？ では」

朔夜に反論させないまま、鏈は離れた。違う生徒の所に行き、またその毒舌を振るっている。

もっとも、彼がじっと答えを待っていたとしても、朔夜が何か言えたかどうかはまた別の話である。事実に対する反駁はできない。

鏈は「また」と言った。彼は、流翔副会長が現れてすぐにやめたことを知っていて言及しなかった、ということだ。意地が悪い。

結局、朔夜はここでも歓迎されていないのは確実のようだ。

午後10時10分。

今日の授業は滞りなく終わった。1学年上の授業ということもあり、朔夜にとって新鮮な部分が多く、本気で飛び級しようかと思ったほどだ。

仕事もほとんどなかったため、朔夜は結局一度も流翔校舎には寄らず、寮に直接帰って来た。

あまりに暇だったので副社長に持ってこさせた自分の会社のデータなど見ては寮の電話からケチをつけていたときのこと。

ピリリリリ

机の上の携帯電話が鳴った。

「言ったことはよろしく。ではまたそのうち」

『中学生はおとなしく勉強してろ！ 来るな！』

副社長の文句を無視して切る。そして、携帯電話を手を取った。

また一真からかもしれない、と思って一瞬迷ったが、朔夜は電話に出た。

「……もしもし」

『エセ中坊かい？』

漣水連教諭であった。そういえば、星河家の電話からかけられるのなら、彼女もこの番号にかけてくることは可能なのだ。

『敵前逃亡たぁいい度胸だね』

「今日は、授業にはきちんと出ていたはずだが」

自分で口にしていて、言い訳くさいと思った。

『まあそれはとりあえず置いておいてやるけど』

なら最初から言わなければいいのに。

『今日は一真が、前の学校の友達に会ったからちょっと遅くなるって言ってたんだけどさ』

前の学校の友達。

おそらく、昨日の少年のことだろう。どうやら、今日は一真に会えたらしい。

謝ることも、できたのだろうか。

「それで？」

『まだ帰らないんだけど、あんた知らないかい？』

「今日は星河には会っていない」

『肝心なときに役に立たない奴だね。ならいいさ。それより補習覚悟しときなよ』

「だから、今日はサボっていないと言って」

ブチッ ツー、ツー、ツー

聞こえる音が、向こうが受話器を置いたことを教えてくる。

生徒の話も聞かないような教師を推薦すべきではなかったかもしれない。

時計を見る。10時20分。

高校生が遅くなると言った場合、これは範疇外だろうか？

朔夜はしばらく考えていたが、またも電話を取って、どこかにかけた。

「もしもし、流翔の冬朔夜だが」

『何の用だ？』

相手は門番。口数は少ないが、幻瑞会長とは違って必要なことは言ってくれる。

「昨日星河一真の友人だと言っていた少年、おそらく今日も現れたはずだが、彼の名前は分かるか？」

みどりや いつき

『碧谷 齋 と名乗った』

漢字を聞き出し、礼を言って電話を切る。

あまり気は進まないが、また電話をかける。

「冬だ」

相手が英語でしゃべりだしたりしないうちに名乗る。

『何の用だい？』

先ほども聞いた教師の声。

「その家に、星河の前の中学の名簿はあるか？」

『さあ、あるかもしれないけど？』

「碧谷齋という人物の連絡先が知りたい」

『何で』

「星河の友達というのは彼らしい」

『ふーん。で？』

軽く問い返されて、朔夜は言葉に詰まった。

「で、とは？」

『一真が誰と遊んでようと別に構わないよ。あたしも昔は結構夜まで遊んだしね。大体、電話番号教えるなんてプライバシーの侵害じゃないか』

意表を突かれた。

「なら、何故私に電話してきた？」

『補習のお誘いだろ？』

「何を……」

『まあ、補習の合間に家にある物見られたからって、多少は仕方ないとは思うけどさ』

一拍の後、朔夜はやっと相手の言いたいことを理解した。

『熱血教師の水連ちゃんは、熱心な生徒はいつでも大歓迎さ。たとえ今すぐにでもね？』

ここまでくれば、答えは決まっていた。

午後11時10分。

この電話は今日何本目だろうなどと思いながら、朔夜はダイヤルを回していた。

『もしもし、碧谷です』

よし。

「夜分遅くにすみません。今日斎君にお会いした星河の……」

星河の、何だ。

『いつきーっ。星河くんだってよー』

いや、違う。

『もしもし、一真!?!』

違うって。

『どこに跳んだって？ 大丈夫?』

「跳んだ?」

訝しげな声を返すと、さすがに向こうも勘違いに気づいたらしい。

『あれ? 一真じゃない? すいません。どちら様でしょうか?』

「冬朔夜という者だが。一昨日校門で会っただろう」

口調を戻す。敬語など何年ぶりだっただろう。

『ああ、あの』

納得の仕方が微妙だが、とりあえずよしとしよう。

「星河がまだ帰宅していないのだが、何か知らないか?」

『え。帰ってないんですか!?! あの、残念ながらどこに跳んだのかは知らないですけど』

何かおかしい気がする。

「まず確かめておきたいのだが……跳んだというのは、超常的な意味で?」

『えーと、よく分からないですけど、今日は1時間ごとに跳んじゃうんだよなとか言って、本当に消えてしまいました』

何だそれは。

「とにかく、それは何時ごろ?」

『確か、6時ちょうどですよ』

もう5時間は経っているわけだ。

しかし、一真が朔夜の知らないところでテレポート能力を持っていて勝手に跳んでしまうのだとしたら、単に帰れなくて迷っているだけだという可能性は十分にある。

『でも、あまり遠くには跳ばないって言ってましたけど。歩けば一時間以内に帰ってこられる位だ』

朔夜は違和感の正体に気がついた。

「碧谷、と言ったか? 君は前から、星河の能力について知っていたのかね?」

彼は、あまりに落ち着きすぎているのだ。

『そちらは?』

やや警戒気味の声。

「……知らなかった、が。少なくとも偏見を抱くことはないと言っておこう」  
正直に告げる。

『その断言をどうやって信じればいいんです？』

彼は、一真のいい友人なのだろうな、と思う。

「多少プライバシーに踏み込むが……星河に謝罪することはできたのか？」

『え』

電話越しにも、彼が息を呑んだのが分かる。

『な、な、何で』

「具体的な内容は知らないが。そばにいる人間の考えていることが伝わってきてしまうことがあってね。うちの学校にはそういうのがごろごろしている。だから、テレポート程度では何も思わない」

『……』

これで説得できるかどうかは微妙な所だが。

それに、変な場所に跳ばされて戻ってこれないのなら、騒ぐほどのこともないのではないかな？

『コミュニケーションはキャッチボールだ』

唐突に変なことを言い出した。

『あいつが投げ返してこないから、俺の手元にはボールがない』

何の話だ。

『だから、今のところ待つしかないんだよな。……一真の言葉です』

「そ」

『一真の居場所を知っています』

(は?)

「私の記憶が確かなら、確か君は知らないと言わなかったか？」

『一真が別れた時に跳んだ場所は知りません。でも、今の場所は分かると思います。一真を探しに行くなら連れて行ってください。それが交換条件です』

話の展開が速い。

「待て。何故分かる？ しかも、この時間に出かける気か？」

『抜け出すくらいできますよ。話している時に、発信機を一真の鞆に放り込みました』

この少年は本当に一般人だろうか。

朔夜は心底疑問に思った。

「それは、私と行動を共にするということでもあるのだが」

『当たり前じゃないですか』

「その間、思っていることが筒抜けでも？」

受話器の向こうの反応を待つ。

3秒とかからなかった。

『そういえばそうですね』

それでも、やめるとは言わない。

朔夜は決めた。

「今、星河家にいる。気が変わらなければ30分以内に来てくれ」

ついでに、付け加える。

「そのときには、敬語をやめてくれるとうれしい」

## 5 因果応報の五日目

---

午前零時。

「この辺り、かな」

やけにごつそうなモニターと点滅する点を見つめながら、斎が言う。思ったことも口に出すことにしたらしい。

「ちょっと精度が低いんだよなあ。あまり使う機会もないからいいかと思っていたんだけど」

「今度専門業者でも紹介しよう」

精度が低いので、この辺りだということしか分からないらしい。もちろん、ないよりはマシだが。

「それはどうも。やっぱり高校生に売ってくれる人は貴重で」

あえて突っ込まないでおくことにする。

ピリリリリ

かなり聞きなれた電子音。

「もしもし、流翔」

『もしもし、その辺りに一学期にどこかの班が頭をつぶした組織の残党がいるらしい』

春宮だ。挨拶もない辺りが彼女らしい。

「住所は？」

『富士不見町 そらしろ 空代 西5-8-1』

朔夜は手近の標識を見た。空代西5-5。

「わかった。礼を言う」

『ちなみに、夜更かしは美容の敵だということを知っていたか？』

「……聞いたことはある」

『では、また明日』

「ああ」

何を要求されるか恐ろしいが、とりあえず気にしないでおくことにする。

「誰です？ あ、誰？」

そんなに無理して敬語をやめなくてもいいのだが。

「春宮という、私の――」

それこそなんだ。

「魔技会――生徒会で一緒の、まあ、友人だ」

「聞こえたんだけど、その辺りって、どうして僕たち、いや、むしろ冬くんの居場所が分かったんだろう？」

冬くん。

これほど耳になじまない言葉もない。

「紋証――これだ、これに発信機が内蔵されている。魔技会室のパソコンからなら居場所が分かるはずだ」

ということは、この夜中に魔技会室にいるということになる。確かにあとで何らかの形でお礼をしなければなるまい。あまり想像したくはないが。

「一真もそんなの付けてたらよかったのになぁ」

斎の独白で我に返る。一真も、付けてはいたのだ、半日は。

「外でこんな物付けていると、妙な輩に狙われるだけだよ。何せ、魔技会役員であることを堂々と言いふらしているようなものだから」

半日というのは、目を付けられるのには十分な長さとは言えないが、全くないこととも言えない。あとは運の問題だ。

「そういえば、魔技学園には、その、いろんな人がいるって話を聞いたんだけど、本当？」

いろんな人。奥の深い表現だ。

「まあ確かに多種多様な者がいるが。人間でないのも含めて」

<見てみたいような、見てみたくないうな、うーん>

「興味があるというならそのうち星河にでも案内してもらいたまえ。私としてはできれば、星河の話を知りたい」

「一真の？」

<一真本人が言わなかったんなら、言わない方がいいのかなぁ>

「それは承知の上で聞いているのだが」

だが、やはり聞くべきではないのだろうか、とも思う。

<まあ、どうせそのうち何か起こるだろうしなぁ。一真だって聞かれたら答えるだろうし>

「えーと、学校で、たまに変なことがあって。声が降ってきてその言葉が当たるとか、昨日植えた種がもう花を咲かせたとか、春に雪が降ってきたとか」

「……そんなにいろいろあったのか？」

それは1人の仕業ではないと思うのだが。

「それで、6月の……初めかな。水槽が落ちそうになったことがあって」

「水槽？」

「クラスで熱帯魚を飼ってたんだ」

そんなことを聞いたわけではないのだが。

「その水槽が窓から落ちかけて、一真が止まれって言ったら止まって。水とか空中で止まるんだよ？ あれはさすがに、みんな驚いたなぁ」

まあそうだろう。まったく動じない人物は最初から魔技にでも入れ。

「それで、今までのおかしいことも、考えてみれば一真が中心にいたなって噂になって……」

「それは本当に？」

実は複数の能力を持っている物は少ないのである。魔法使いなどは除くが。

「えーと、声が降ってきたときには一真だけ確か聞こえなくて、花が咲いたときには植えたのが一真で、雪が降ったときには雪の話をしてたんだっただけかなぁ」

「断定はできないくらいの関わり方だな」

しかし、噂になるには十分だろう。

「それに、一真が日本にいないときには何も起こってなかったんだ。だから、その日からみんな

が一真を避けだして、僕も……」

心を聞かなくても予想は付く。

「だから、謝る、か」

「次の日に話しかけられなくて、その後も、謝ろうと思ったんだけど3日ともダメだった」

6月の初め。直後の4日間。その後は、話しかけられなかったわけではないが、謝れなかったということになる。

「もしかして、日本からいなくなったのか？」

「そう。一真は逃げたわけじゃないだろうけど、どっか外国に行ってそのまま夏休みになって、そしたら転校したって言うから、これは帰りに待ち伏せてでも一言言い逃げするしかないかと」

それで校門で門番に捕まる羽目になったのか。

(聞きすぎたかな)

個人の事情に立ち入るのはいつものことと言えばそうだが、自分から踏み込んだのは初めてかもしれない。

「えーと、ほら、5-7、もうすぐ5-8だよ」

齋が話題を変えるように明るく言った、その時だった。

ドン

腹に響く重低音とともに、前方の建物の一部が中から吹き飛んだ。

走ってたどり着くころには、爆発は落ち着いていた。回りはビル街だったので、人気はない。

「いよっ」

軽い掛け声とともに、3階辺りに開いた穴から人影が飛び出した。

「星河！」

呼びかけると、気づいたらしく手を一一いや、右手に持った銀色の細長い物体を振ってきた。

左肩にかけているのは通学鞆だが、右手に持っているのは、日本刀だ。

「どうしたんだ冬、あわてて」

駆け寄ってきた朔夜に対してもつれない言葉である。どうやら、心配の必要はなかったらしい。

「あれー、珍妙な取り合わせ」

後ろから遅れて到着した齋と朔夜を見比べて、のんきに感想を述べる一真。

「だから、もっと体力付けろって言っただろ、齋」

「そんな、一真に、比べたら、誰だ、って」

息が切れている。確かにあまり体力はないらしい。

「漣教諭から、君がいまだ帰宅していないという話を聞いたもので」

違う。こんなことを言いに来たのではないはずだ。

「こら、待てー」

やや間抜けな声とともに、穴から顔を出す人物。顔よりも突き出ているのは黒光りする金属の塊。

(しまった)

油断した。真下に近いここは狙いにくいだろうが、遮蔽がない。とりあえず、防御のために体に気をこめる。

と。

「しつこいんだよ！」

一真が大振りした刀から気が放たれ、相手をあっけなく吹き飛ばした。

この前見たものよりずっと濃密な気だ。この前は手加減していたのか、あるいは武器の違いかもしれない。

「それは？」

日本刀を指す。

「何か武器がほしいな—と思ったら、ぱっと出てきて。けっこういい刀だぞ、これ」

また違う能力か。

何はともあれ、追っ手が1人とも思えないから、警戒を解くわけには行かない。

「銃は出せるか？」

「銃？ おーい、銃—」

かなり間抜けな呼びかけとともに、一真の目の前に拳銃が現れた。

それをもらって、慣れた手つきで安全装置をはずし、構える。

「何で妙に手慣れてんだよ」

「外国で拳銃くらい撃ったことはないのか？」

「火縄銃ならあるけど」

何故火縄銃？

「げっ、増えてやがる」

上の方からぼやく声が聞こえた。続けて、話し合っているような複数の声。

『我々は一、魔技のやり方に異を唱えるものである—』

拡声器を通していいらしい声。

この期に及んで言論で主張か。

『化け物を放し飼いにしておくことなどもってのほかであり—』

そんな主張は聞き飽きた。

「勝手なことを……」

誰かの声が聞こえた。

一真ではない。後ろからだ。

その人物は2人の脇をすり抜けて、そばにある木を利用し、3回ほどの跳躍で穴の中に飛び込んだ。

「……碧谷？」

「高校生相手に銃まで持ち出して、あげくに化け物だ!? お前たちの方がよっぽど人でなしだ!!」

声が聞こえる。確かに斎のもののようなのだが。

「やべ。斎が切れた」

いや、切れたとかいう問題ではなく。

「今、異様な身体能力を発揮しなかったか？」

「切れた斎は怖いからなあ」

だから、そういう問題ではないだろうに。

「まあ、無敵斎なら怪我はしないだろ。落ち着いたら回収して帰ろうぜ。眠いし」

いいのかそれで。

そして、このまま帰るわけにはいかない。

ここで逃げたら、おそらく逃げっぱなしになる。

「あー、星河」

「何だよ？」

「……君の能力についてだが」

違う。

「碧谷に聞いてしまった」

「ああ、うん。でも、大体役に立たないしな」

(?)

「役に立っているじゃないか」

日本刀を指して言う。

「今日はな。でも、何できるか分からないと何もできないし。昨日――もうおとといか、は困ったけど」

休んだ日のことだ。

「よく分からないのだが」

「聞いたんじゃないのか？ 俺、1日ごとに能力が変わるんだよ。だから、何ができるのか分かんなくて、何もできない日の方が多いんだ」

何だそれは。

一日ごとに違う。駅まで行ったが無理だった。尊敬する。

朔夜は考えてみた。

「もしかして、一昨日は、読心能力だったのか？」

「多分な」

肯定されて、そこで会話が途切れてしまう。一真は聞かれたことには答えているが、自分は、そんな質疑応答をしたいわけではないはずだった。

「星河」

何を言う？

心は決まっていたが、口はなかなか動いてくれない。

何秒、何分経ったか分からないが、一真は無言で待っていた。

うつむいてその顔を見ないまま、かすれた声で朔夜は告げた。

「すまない」

その後の時間は、さらに長く感じられた。

一真は何と言うだろうか。

「ばーか」

誰かの手が、頭を乱暴に撫でた。

顔を上げると、一真は笑っていた。

午前1時。「それで、碧谷はどうするんだ？」

朔夜と、斎を背負った一真は、帰途についていた。

「うちに泊めるよ。もう寝てるし。電話入れとく」

「彼は、抜け出してきたはずなのだが」

「あのなあ、抜け出すときにはバレなくても、朝までバレないわけないだろ？ 親ってのは結構見てるもんだぞーあぁ、お前寮だっけ」

「まあな」

寮長も押し付けられそうになったが、社交性がないのでやめることになったのは言わないでおく。

「それよりさぁ、お前明日どうするんだ？」

「どうする、とは？」

「いや、その、よく分からんけど飛び級とかしてただろお前」

「ああ」

そういえば、そんなものもあった。

「あれは体験コースだから、まあやめるだろう。幻瑞聞島にいやみを言われたし」

「幻瑞？」

「あれには近づかない方がいいぞ。そういえば、春宮や副波輪にもいろいろ言われたな。君はよほど気に入られたらしい」

「へ？」

意外そうな声を上げる一真。自覚がないらしい。

「副波輪て古降谷先輩だろ？ 『冬坊をよろしく』くらいしか聞いてないけどなあ。それに春宮は、今日話したけど、あれはどっちかって言うと……」

「どちらかと言うと？」

気になる。

「俺が思うにさー、俺が気に入られたんじゃないかと、皆お前が心配だったんじゃないのか？」

(は?)

「何故」

「いや、何故とかいうもんでもないし。お前行動パターン変えただろ。少なくとも春宮は心配してたぞ、多分。うん、あれはきっとそうだ」

どれだ。

「ちょっと待て。一体春宮は何を言った？」

「んー、秘密ー。知りたきゃ春宮に聞けよ」

「それができれば苦労しない」

ただでさえ借りも作ってしまったし。

「あ、そうだ」

一真が声を上げる。

「そんなこと言ってごまかそうとしても」

「お前もうち泊まれば？ もう遅いし」

意表をつく言葉だった。だが、確かに、ここからでは一真の家の方が近い。

「まあ、その方が合理的かもしれないが」

「お前な、そういうこと言っていると泊めてやらないぞ」

「すまない、うれしいとは思っている」

あわてて言うと、一真はなぜか後退った。

「お前、何か悪いもんでも食ったのか？ 何かこう、やけに素直だぞ」

「失礼な」

「こらガキども！ 夜中に騒いでるんじゃないよ、近所迷惑だろ！」

と、いつのまにか一真の家の前に着いていた。小声で器用に迫力を出す女性が玄関から顔を出している。

「ほら、入れよ」

先に入って手招きする一真。

「ああ」

今夜はよく眠れる予感がした。